漱石が聴いたクラシック音楽の世界へ——

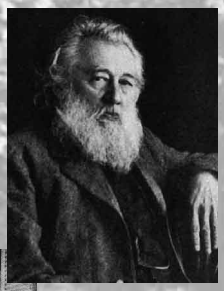
新宿区ゆかりの文豪、夏目漱石はどのようなクラシック音楽を体験したのか、それが本公演のテーマです。『漱石が聴いたベートーヴェン』の著者である瀧井敬子氏のレクチャーと東京フィルハーモニー交響楽団の協力による演奏が、漱石が体験した当時のクラシック音楽の世界へご案内します。漱石が実際に聴いた曲をお聴かせするだけでなく、漱石が敬愛した哲学者ケーベル先生の音楽家としての側面にもフォーカスをあてる異色の公演です。

漱石にコンサート通いの手ほどきをしたのは、俳句の弟子にして物理学者の寺田寅彦でした。『吾輩は猫である』に登場するクラシック音楽通の水島寒月は、彼がモデルです。『野分』には、大学は出たけれども働いてもいず、どうもさしあたり働く必要も感じていないような二人の若者が登場します。高柳君と中野君です。高柳君は中野君に半ば強引に、東京音楽学校（現東京藝術大学音楽学部の前身）の奏楽堂コンサートへ連れて行かれますが、中野君は寺田寅彦、高柳君は漱石自身の分身でした。

日本に西洋の音楽が入ってきた明治時代、漱石はクラシック音楽を聴いてどのようなことを感じ、また、それは漱石の創作にどのような影響を与えたのでしょうか。

ぜひあなたの目と耳で感じてください。

夏目漱石（上）は、寺田寅彦（左）を指南役として、しばしば音楽会に通った。



漱石が敬愛したケーベル先生。師への思いは漱石の随筆にもしたためられている。

『野分』に登場する音楽家のモデルとなった幸田延・幸姉妹（前列左から2人目と右端）と、ケーベル先生（後列右から2人目）。

瀧井 敬子（東京藝術大学社会連携センター教授）

日本近代音楽の草創期とドイツ・ロマン派を専門にする音楽学者。著書に『漱石が聴いたベートーヴェン』（中公新書）、編著に『森鷗外訳オペラ「オルフエウス」』（紀伊國屋書店）、『ゼッキンゲンのトランペット吹き』（同）、共著に『オペラの地平』（彩流社）などがある。訳書は『謎のヴァイオリン』（H. ミュラー著／新潮社）、『大作曲家の和声』（D. モッテ著／シンフォニア）をはじめとして多数。「藝大アーツ イン 東京丸の内」の総合プロデューサーとしても注目されている。

堀江 真理子（ピアノ）

東京藝術大学在学中に渡仏、パリ国立高等音楽院を卒業。幅広いレパートリーをもつ中で、特にフォーレのピアノ曲と室内楽曲の全曲演奏会を日本とフランスで行い、“フォーレのスペシャリスト”として高く評価された。また明治生まれの日本の作曲家のピアノ作品によるコンサート活動とCD「1900年 啓かれた日本のピアノ」（レコード芸術特選盤）が大きな注目を集め、進行中のレクチャーシリーズコンサート「日本のクラシック音楽の歩み」も話題を呼んでいる。

羽山（はやま） 晃生（こうせい）（テノール）

武蔵野音楽大学及び同大学院修了。二期会オペラスタジオ修了。第25回イタリア声楽コンコルソ入選。イタリア留学。新国立劇場『スペインの時』ゴンサルヴェ役の急遽の代役として出演、柔らかい美声と音楽性で高い評価を得た。その後も二期会／ベルリン・コーミッシェ・オーパー共同制作『イェヌーファ』大役ラツァ・クレメニュ役等、二期会、新国立劇場、東京オペラ・プロデュース、東京室内歌劇場を中心に活躍している。二期会会員。

東京フィルハーモニー弦楽四重奏団

東京フィルハーモニー交響楽団弦楽セクションのメンバーからなる弦楽四重奏団。東京フィルは2011年に創立100周年を迎える日本で最も伝統あるオーケストラで、“シンフォニーとオペラ”の両機能を併せもち、約160名のメンバーを擁する。常任指揮者はダン・エッティンガー。1950年代には夏目漱石の長男・夏目純一氏がコンサートマスターを務めていた。
公式ウェブサイト　http://www.tpo.or.jp

水鳥 路
（ヴァイオリン）

栃本 三津子
（ヴァイオリン）

中村 洋乃理
（ヴィオラ）

服部 誠
（チェロ）

主催：SHINJUKU 新宿区　　制作：東京フィルハーモニー交響楽団

問合せ先：新宿区地域文化部文化観光国際課　電話 **03-5273-4069**